

聖書:使徒の働き18章1～17節

説教:恐れなくて語り続けなさい

はじめに

いつものように前回までのあらすじを振り返ります。パウロが向かったアテネは、ギリシャ哲学が盛んなところで人々はいつも広場で議論しているところです。そのいっぽうで町を見渡せば、あちこちに偶像があふれていて、なかには「まだ知られていない神に」と刻まれた祭壇まで置かれているようなところでもありました。それを見たパウロは、「ではみなさんがまだ知らない神について教えましょう」と切り出して福音を語ります。新しい話には興味を示す人々でしたから、最初非常に熱心に聞いている。ところがパウロが死者の復活の話になると蔑むように笑いだしてみな席を立てしまう。ところがそれでも、何人かの人たちがパウロに従い、救われていきました。パウロは他の手紙で、福音は世の人たちには愚かに聞こえても、人を救いに導く神の力なのだと語っていますが、まさにそのとおりです。

今日の所でパウロはアテネを去ってコリントに向かいます。ここは島に囲まれた大きな港があって、昔から通商と交通の要衝として栄えたところとして有名でありましたが、「コリント」という名前が不道德の代名詞になるほど、靈的に大きな問題をかかえていた町でもあったそうです。そこで何が起きたか。ともに見てまいります。

1 コリントの町で

1) プリスキラとアキラ

ところで3節に、パウロが天幕作りをしたということが書かれていて、こ不思議に思うかもしれません。伝道旅行に出発するときは、教会から十分な支援を受けていて、おそらくシラスとテモテがそれを管理をしていた。ところがベレアで迫害が起こるとパウロひとりがアテネに逃れたのですが、そのとき十分なお金を持っていなかった。それで当面の生活費を稼ぐために天幕作りをしたということなのでしょう。2節にもありますが、ユダヤ人は町から追い出されるリスクをいつも抱えながら生きています。それで親たちは、どこにいても生活できるように子どものときから手に職をつけさせるのだそうです。パウロが教えられたのは天幕作り。それで同業者だったアキラとプリスキラと出会い、そこで福音が伝えられて、やがてこの二人はエ

ペソに移住してエペソ教会の土台になっていったことが18節で出てきます。

そうこうするうちにシラスとテモテと再会できて、パウロはいつものようにユダヤ人の会堂で福音を語り始める。ところが覚悟はしていましたがここでも大きな反対を受ける。そこですでに信者になっていた異邦人ティオティオ・ユストのところに身を避けることにしました。

2) 恐れ

このとき救われたのはユストだけではありません。7節後半から8節。「その家は会堂の隣にあった。会堂司クリスポは、家族全員とともに主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受けた。」

会堂司であったユダヤ人クリスポも救われていき、コリント教会の土台となる人たちが起こされていきます。明るい気持ちになっても良さそうなのに、どうもパウロは落ち込んでいる。どうしてそうわかるか。二つ理由がある。一つ目。9節の最初に「恐れなくて」とあります。なにか恐れていなければこんな語りかけはありません。二つ目。ティオティオ・ユストの家が会堂の隣だったということと、会堂司の家族が救われた、そのことが関係している。ユダヤ人たちはパウロに向かって口汚くののしり、パウロも「私には責任はない」と啖呵を切って会堂から出て行ったくらいの犬猿の仲です。そのまま済むはずはありません。ユダヤ人たちはパウロがこの町で何をしているか、常に監視して邪魔をしようとしています。パウロだってユダヤ人たちとはトラブルは起こしたくない。できれば距離をとっていたい。ところが、パウロが定宿としたティオティオの家はユダヤ人会堂のすぐ隣、おまけに会堂の近くに住んでいた会堂司がクリスチャンになった。ユダヤ人の目と鼻の先で出入りしなければならない。これには相当神経を使う。そういうことが関係して落ち込んでいたのではないか。

2 主の励まし

1) 語り続けなさい

そんなときに主がパウロを励まします。9、10節。「ある夜、主は幻によってパウロに言われた。『恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるので、あなた

を襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。』」

主は三つのことを語っています。一つ目は、恐れないで、語り続けなさい。黙ってはいけない。パウロは主の十字架の死と復活を宣べ伝えるために召されました。パウロは、そのことを一度も疑ったことはない。けれども強いプレッシャーに押し潰されるようにして心が落ち込んでいくと、気持ちも体も前に進みません。鬱的になった方はよく分かると思います。確かに12節以降のパウロの様子を見ると、パウロが自分から積極的に語る場面がなくて、おとなしい印象があるのです。そんな状態の人に「語り続けなさい。がんばれ」ということは言うてはいけません。これが世間の常識です。もちろん主のことばはここで終わりません。

2) わたしがあなたとともにいる

それが二つ目のことになります。「わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。」どんなに強い信仰をもっている、行く先々で決まってユダヤ人から迫害を受け、町から逃れなければならない。そんなことが続くと、主が自分と一緒におられるという実感が薄れてくるでしょう。「私がこんな目にあっているのに、主よ、あなたはどこにおられるのですか。」と叫んで、ますます暗い穴の底に落ち込んでしまいます。おそらくパウロはそこまで追いつめられていた。そんなとき「わたしがあなたとともにいる」との語りかけを直接聞きます。

私たちは、パウロのように主の励ましを直接耳で聞くということはないかもしれませんが。けれども聖書のみことばから励まされることがあります。信仰の友がそばにいてくれて慰めてくれるときがある。ただそばにいてくれるだけで、心に平安をいただくことがある。実はこれが、この後でもふれることとなりますが聖霊の励ましということです。

3) この町には、わたしの民がたくさんいるのだから

主が語ってくださった三つ目のこと。「この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」主はパウロに語りかけて励ましています。でも主がご覧になっているのはパウロだけではない。コリントに住む、まだ主を知らない人たちのたましい。それをご覧になっています。パウロが語らなかつたなら、コリントの人々はどうやって福音を知ることができるのか。パウロ、あなたは黙ってはいけません。語り続けなさい。ここが主に召された者の

厳しさになります。召された者は、どんなときでも語り続けることを要求される。それはひとえに、主がどれほどに私たちを愛しておられるか、そのことがあるためです。

3 聖霊の助け

1) パウロが口を開こうとすると

主からの励ましをいただいたパウロは、覚悟を決めたように腰を据えて一年半の間コリントに滞在して福音を語りました。ところがここで問題が起きてしまいます。ユダヤ人たちは一斉にパウロに反抗して立ち上がり、彼を法廷に引いて行く。そうすると、「わたしがあなたとともにいる」と語られた主の約束はどうなったのか。「あなたを襲って危害を加えることはない」と言われていたのに、危害を加えられているではないか。主のみことばは気休めに過ぎなかったのでしょうか。そんなことはありません。よく読んでください。パウロは確かに法廷に引かれて行きました。でもむちで打たれたのでしょうか。いいえ、むちで打たれたのは別の人でした。それだけではありません。地方総督ガリオはどんな人ですか。裁判所の前でユダヤ人たちが不法なことをしても気にもとめない。法の正義などどうでもよくて、とにかく自分は手を汚したくない。そんな人が裁判官だったのに、パウロは無罪放免となって釈放されました。運が良かったという話しではありません。

聖書にはこう書いてあります。14節。「パウロが口を開こうとすると、ガリオはユダヤ人に向かって言った。」当然ですが、パウロは自分で自分を弁護するつもりでした。いざとなったらローマ市民権という切り札も持っていました。ところがパウロは何も語っていない。ガリオが一方向的に語り、終わってみればパウロは危害を加えられず、無事に済みました。主がパウロとともにおられました。もう少し細かく言えば、ここには聖霊が働いておられたのです。

2) そのとき何を語るのかは聖霊が教えてくださる

ルカの福音書12章11、12節にこういうみことばがあります。「人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」

私たちは役人や権力者の前で弁明する機会はありません。けれどもなにかのトラ

ブルが起きたときに相手にどう弁明するか、頭を悩ますことがときどきあります。心配しなくてもよいと言われても心配してしまいます。けれども、その時、その瞬間になって聖霊が働いてくださり、思いもかけないことをしてくださる。そのようにして、主が私たちとともにおられることを教えてくださる。そのことを信じなさいと言われます。

そしてもうひとつ、気落ちするパウロを励ましてまで、まだ救われていない魂のために福音を伝えようとされる、主の愛を覚えるのです。

このようにしてくださる主とともにまた歩んでまいります。